The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Guillaume Sibertin-Blanc, ”Deleuze et l’Anti-Œdipe : La production du desir, par Guillame Sibertin-Blanc”, PUF, 2010
Author(s)	吉上, 博子
Citation	年報人間科学. 2012, 33, p. 127-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Guillaume Sibertin-Blanc

Deleuze et l'Anti-Œdipe: La production du désir, par Guillame Sibertin-Blanc

PUF, 2010

吉上 博子

本稿で紹介するギヨーム・シベルタン＝ブランの著作『ドゥルーズとアンチ・オイディプス：欲望の生産』（PUF, 2010）は、そのタイトルからも伺えるように、かなりまっとうな種類の『アンチ・オイディプス』の解説本である。本書で読み解かれる『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂症』（原著名 L'Anti-Œdipe。略号は AO）は、哲学者ジル・ドゥルーズと精神分析家／活動家のフェリックス・ガタリによって 1972 年に出版された大著である（1975 年に増補版）。『アンチ・オイディプス』の大きな目的のひとつは、まさに看板に掲げているように「反オイディプス・コンプレックス」、すなわち精神分析を批判することである。彼らは欲望を家族内に閉じ込めようとするフロイト的なオイディプス主義を糾弾しながら、欲望はつねに社会的であると主張する。そして『アンチ・オイディプス』は明らかに直前の 1968 年の学生運動の影響のもとにあり、資本主義批判、国家批判といった政治的意図を併せ持っていると同時に、彼らの姿勢は、一見したところ分裂症 (1) や革命といったものへの賞賛とロマンチシズムに充ちているように思われる。だがこれは本書に対するかなり一般的で表面的な理解にすぎないのだとシベルタン＝ブランはいう。彼が端的に述べているように、精神分析の家族主義の問題は、精神分析家の無意識の欲望に対する見誤りなどという単純なものではない。寧ろ思考せねばならないのは、このような家族主義がわれわれの生きる資本主義社会や政治的場においていかに機能するかという問題である (2)。つまり『アンチ・オイディプス』の読解には重要な二つの軸が存在する。まずはマルクス主義的な資本主義批判の軸があり（実際この本では資本主義の仕組みについてのかなり有効で的確な記述がなされている）、その土台があってこそ、フロイト主義的な精神分析に対する批判をなしうるのである。資本主義に特有の主体形成を批判しながら、シベルタン＝ブランはこれに対する闘争の形態を見出そうとしている。

本書は全三章からなる 150 ページほどの小さな本である。章立てはほぼ『アンチ・オイディプス』に対応しており、第一章では欲望の生産、国家、資本主義と精神分析など、重要なタームを登場させながら、本書の全体的問題提起がなされる。第二章では精神分析の家族主義批判、結論に当たる第三章では、資本主義と国家の関係、そしてドゥルーズとガタリが提唱する分裂症分析が社会野や政治的実践とどのように関係するかが記述される。

著者略歴

以下本書の内容を大まかにまとめようと思うが、その前に著者の経歴を簡単に紹介したい。著者ギヨーム・シベルタン＝ブランは、フランス生まれの若手の現代フランス思想研究者である。現在はトゥールーズ・ミライユ大学で哲学を教えている。彼の哲学者としての仕事は二種に大別することができる。まず彼はベルクソン研究者であり、近年出版されている PUF のベルクソンの注釈・校訂版（éditions critiques、通称 Le choc）に幾つもの原稿を寄せている。また彼は、雑誌『今日のマルクス』（パリ）や『哲学と社会』（ベオグラード）の編集者、ドゥルーズ、フーコー、アルチュセールやマルクスの読解者としての、かなり政治的な一面を持ち合わせている。彼の博士号学位取得論文「政治と臨床（ジル・ドゥルーズの実践の哲学についての探究）」に見られるように、恐らく彼の一番の関心ごとは「ドゥルーズ哲学の政治的実践的読解」であり、彼の初めてのドゥルーズに関する単著である本書『ドゥルーズとアンチ・オイディプス』においても、その傾向が顕著にあらわれている。

欲望の生産

さて、ここからは本書の要旨をざっと見ていこう。

生産の一義性、すなわち欲望的生産と社会的生産の一義性は『アンチ・オイディプス』における重要なテーゼのひとつであり、本書でも第一章冒頭で取り上げられている。ドゥルーズ／ガタリは欲望の生産に関して、分裂症的と形容される無意識の欲望の多産性が、絶えず社会的生産によって抑圧されていると批判的に述べる。無意識の欲望は、なぜ抑圧されてしまうのか。それについてはまさに「資本主義と分裂症」の関係を考察せねばならない。シベルタン＝ブランは、ドゥルーズ／ガタリに寄り添って資本主義の社会的・経済学的プロセスと欲望の生産の分裂症的・形而上学的プロセスを同列に記述しながら、両者の関係を以下のようにまとめている。

資本主義は分裂症的な無際限の生産・再生産運動をその仕組みの重要な要素とする。しかし資本主義と分裂症は、互いに親和性を持つものの、同一性で結ばれるものではない。両者の間には寧ろもっと緊張した関係が存在する。分裂症的プロセスは一面では資本主義のシステムの歯車の一部であるが、他方でそれは資本主義の「絶対的な極限」でもあるのだという。つまり、分裂症的な脱コード化の運動を原初的な無意識の欲望と呼応させて考えるならば、この無意識の欲望はある点では資本主義の壁を突き抜けるかもしれない危険なものでもある。こうした欲望を整流しつつ、絶対的極限の拡張に従って移動する資本主義の内的・相対的な極限を設けるのが社会体であり国家装置である。分裂症とは、すなわち資本主義の隔たり、死、終末論の問題である。そのために社会的生産は欲望的生産を抑制し内的限界を維持しようとするとされる。

第一章の終わりでシベルタン＝ブランは、分裂症の革命的使用、分裂症の資本主義に対する断絶の可能性という『アンチ・オイディプス』における大きなテーマを持ち出すが、その問題は、次章で社会的個人

のオイディプス的主体化と資本主義の歴史との記述がなされたあとに再び取り上げられるだろう。

資本主義と主体のオイディプス化

本章の第二章では、資本主義に特有の主体としてオイディプス的主体が形成される経過が記述されている。まず、ここでいわれているオイディプス的主体とは何か。簡略化していうと、フロイトに顕著であるのだが、精神分析医は患者の病理を、精神分析的解釈においてすべて父や母との性的関係に落とし込んでしまう（いわゆるオイディプス・コンプレックス）。ドゥルーズ／ガタリは、こうして欲望を常に家族という内側に収束させることを、欲望の現実を見ていないと言って批判する。しかしその後で、実はこうした内面的主体、オイディプス的主体を生んだのは、精神分析ではなく資本主義であると記述される（AO321）。資本主義とオイディプス的主体についてのシベルタン＝ブランのまとめを見てみよう。

オイディプス的主体が出現する重要な契機は、資本主義社会に至って、家族が社会的生産・再生産のプロセスにおいてもはや重要性を持たなくなったことだと言われる。『アンチ・オイディプス』第三章で詳述されているように、未開社会における家族は、常に経済学的、政治的、文化的社会野において重要な役割を持っており、縁組は常に外的・社会的な運動であった。しかし、資本主義への移行と性や婚姻に関する因習（コード）の重要性の衰退にともない、家族は社会的生産・再生産の中で固有のコードを展開しなくなる。社会性から後退した家族はひとつの閉じたミクロコスモスとなり、そこではあらゆる社会的、経済学的、政治的問題が、システマティックに、自己同一化された主観性の表現として翻訳されるようになる。つまり、ここであらゆるシニフィアンはパパ・ママ、去勢、罪責感といった精神分析のタームに置き換えられてしまうのである。

こうして精神分析の家族主義と社会体の変移が記述されたあと、家族主義と、資本主義の矛盾的力学との関係が明らかにされる。前述したように資本主義社会は、欲望的生産の内的極限と社会的生産の外的極限という二重の極限を持つのだが、これの前者は分裂症的、後者はパラノイア的と形容される。パラノイア者としてオイディプス的主体は、国家であれ家族であれ中心化され内在化された社会の歯車となり、分裂症的な欲望的生産を社会形態に隷属させるものとなる。パラノイア者は欲望機械を枠にはめ込むために重圧的な装置を発明し、ときにそれはファシズムのような危険なものにもなりうる（他方、それが革命的になることもありうる）。

資本主義と国家装置

主体を社会野に従属させ、資本主義の内的極限を強化させる要因が「国家」であるといわれる。いかにして、このように主体を従属させうる国家が登場するのか、またその従属はどのような性質を持つのか。シベルタン＝ブランが本書の第三章でまず扱うのは、『アンチ・オイディプス』第三章における国家論である。ドゥルーズ／ガタリはここで、未開社会、専制君主の帝国、資本主義社会という三つの社会体の特

徴を記述し、各社会体が欲望的生産をいかに調整していたかを丁寧に解きほぐしていく。本章でシベルタン＝ブランが強調して扱うのは、このうち近代国家の枠組みの始祖とされる「専制君主国家」である。

ここで、ドゥルーズ／ガタリの国家論を簡単に紹介する。彼らの着想において、「資本主義」自体は、未開社会や帝国といった前資本主義社会においても潜在し、遍在していたと考えられる。資本主義以前のあらゆる社会体は、自らの社会体の限界を予期し、同時に限界への到達を恐れるがために、さまざまな社会的コード（因習や規範）によって欲望的生産（つまり、前述したような、社会野を絶対的極限へ至らせるもの）を統御しようとする。彼らが恐れる限界とは、「資本主義」のことである。ドゥルーズ／ガタリは世界史を、あらゆる社会形態に潜在且つ遍在していた資本主義が現働化へと至るプロセスとして記述する。こうして彼らが描こうとするのは、資本主義への到達を最終目的としたひとつの「普遍的歴史」である。

さて、シベルタン＝ブランの著作に戻ろう。彼が際立たせる「専制君主国家」及びマルクス由来でドゥルーズ／ガタリが用いる「アジア的生産様式」とは、資本主義における社会的生産の動因としての国家の起源である。社会進化論をとらないドゥルーズ／ガタリにとって、国家や帝国というものは常に存在し、いかなる未開社会でも近隣の大国と関わり合いにならないわけにはいかない。彼らの論によれば、帝国や未開社会の違いは、社会的発達の度合いとして測れるものではない。例えばここでは、国家をもたぬ未開社会は、国家、ひいては資本主義という一種のカタストロフへの発展を回避する社会体として積極的に評価されうる。このような歴史観に従って、当の社会野における欲望の位置づけの相違において、資本主義へ至る展開の度合いを見ることが重要になるだろう。では、具体的に専制君主の社会体における欲望的生産の扱いはどのようなものだろうか。シベルタン＝ブランは、帝国の発生としての「アジア的生産様式」を次のように説明している。国家は農業共同体に付け加わる形で生じ、農業共同体をある程度までは自律的にさせるのだが、それは彼らの生産の徴収や治水などの大規模工事への駆り立てなしではなされない。こうして国家は政治、宗教、官僚制などを含む公的権力の中心となり、領土を横領し、それらすべては卓越した専制君主の身体に結びつけられる。ここから主張されるのは、国家という超越的中心が、社会的生産のみならず、リビドー備給の中心にさえなるということである。このようなことから、欲望的生産が、家族であれ政治的なものであれ、中心としての国家の部品へと従属するよう仕向けられると説明される。

Conclusion, exclusion

最終章にあたる第三章で以上のように資本主義における国家の抑圧的役割を記述したあと、シベルタン＝ブランは結論として、ドゥルーズ／ガタリ政治学の肝となる「分裂分析」についての思考を促す。分裂分析とは何かと問うたときに、われわれは既に本稿でそれを目にしているのである。つまり、（パラノイアックな精神分析に対抗して提示された）分裂分析とは、ある社会体における欲望の位置づけはどのようなものか、欲望が社会においていかなる推進的役割を果たしているか、欲望的生産と社会的生産という二つの体制がいかにして和解するか、以上のようなことを問いに付すことなのである。しかし、解き放たれた欲望の分裂症的体制（潜勢的なもの）か、あるいは社会野の要請に従属したパラノイア的体制（現働的なもの）

か、という一見相反した二極は、双方とも無意識の原初的生産を通過し、常に相互作用で結びつくものであるという点で、どちらに転ぶことも可能なのだ。著者は、分裂症的革命等というわりに分裂分析には政治的綱領と呼べるものが存在しないということを認めつつ、それはまったくネガティブな要素ではないと述べる。分裂症的革命とはどのようなものでありうるかを考えるに、それは単に新しい政治、新しい社会体を目指すようなものではなく、無意識のレベルで革命的切断を実行するものであり、無意識のレベルから政治的社会的創造を実現するものであろうからだ。

シベルタン＝ブランは本書の結論 conclusion で、『アンチ・オイディプス』の最後の数ページにおいて問いは読者である「われわれ」の方に開かれ、著者であるドゥルーズ／ガタリの名は排除 exclusion されると述べている。こうした記述の多数性、開かれ、非人称性は、続く『千のプラトー』序文の「リゾーム」に直接つながってゆくものであろう。

シベルタン＝ブランは本書の著述にあたり『アンチ・オイディプス』及び最小限の文献を挙げるに留めているが、われわれはさらにその続編である『千のプラトー』における議論の発展も考慮に入れるべきだろう。ドゥルーズ／ガタリは『アンチ・オイディプス』において、とりわけ芸術家を範とした「分裂症者」を政治的実践の主体として記述するが、『千のプラトー』においてそれは「万人に共通するマイナー性」というより普遍的なものにスライドする。これはドゥルーズ／ガタリ政治学における重要な展開であると筆者には思われるのである。また、本書は純粋に理論的なものであり、ドゥルーズ／ガタリのいう実践がいかになされうるか見えにくい。これについては、ヨーロッパや南米で行われているドゥルーズ／ガタリ的政治活動や、ガタリが関わったラ・ボルド病院などにおける実践への目配りも必要だろう。

そうしたことは措いておくとしても、本書は『アンチ・オイディプス』の解説としては非常によくまとまっており、明快である。本書はドゥルーズ／ガタリに対して批判的であると言うよりは彼らに密着しながら論を進めており、また、専門家に対して『アンチ・オイディプス』の斬新な解釈を提示するというよりは、この本を迷いながら読む一般の読者のための手引書としての色合いが強い。

注

(1) Schizophrénie は現在「統合失調症」と表記されるべきだが、本稿では河出文庫の宇野邦一訳『アンチ・オイディプス』にしたがって「分裂症」と書く。

(2) Stéphane Legrand et Guillaume Sibertin-Blanc, « Capitalisme et psychanalyse: l'agencement de subjectivation familialiste », in N. Cornibert et Jean-Luc Goddard ed., *Ateliers sur L'Anti-Œdipe*, Mimesis, 2008, pp.77-115.

文献

Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti-Œdipe*, Les Éditions de Minuit, 1972.

Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille plateaux*, Les Éditions de Minuit, 1980.

Guillaume Sibertin-Blanc, « Politique et clinique (Recherche sur la philosophie pratique de Gilles Deleuze) », Thèse pour le Doctorat de Philosophie, dir. P. Macherey, soutenue le 8 décembre 2006 à l'Université Lille 3.

Sibertin-Blanc の仕事については、以下の URL が詳しい。

http://www.europhilosophie.eu/recherche/spip.php?article405